三才児の問題の一つ

及川ふみ

幼稚園では子どもの成長発達にともなって、組の編成について考慮しなければならないことはいうまでもないことである。

ことに三才児の場合においては特に著しいものがあるのではなかろうか。

四月入園頃の三才児の状態と、その後、半年を経過した十月頃の状態とでは大きな変化がみられるのは当然のことであろう。

入園直後の三才児は、普通の保育室で一日中終始している場合が多い。積木や、絵本その他のおもちゃで遊ぶことはもとより、うたを歌い、リズム遊びなどすべての遊びがこの一室でできて、子どもの活動範囲がこの広さでちょうどよい程度であるともいえるのである。そこで三才児の十五、六名の保育室としては広すぎる感のあるほどの、その広さが実際的には必要なわけである。

それはこの時期の子どもは、友だち遊びがまだ十分にできないところから、あちら、こちらに分かれ分かれになって、ひとり二人、三人という極めて少人数のグループで遊んでいる状態である。そのうえこの少人数グループもその継続時間もきわめて短かく、はなれたり、くっついたりがひんぱんで、移動が多いために保育室の広さに十分の余裕があることが必要なわけである。またトイレなども室の副室的に間近かにあることが最ものぞましいことである。

しかしこの状態で遊んでいる三才児も、九月、十月と月がすすむにしたがって、幼稚園の集団生活の経験が多く、半年を経過する時期になってくると、個人遊びも次第に充実しつつ、また友だち遊びにも興味が深くなってきて、グループの大きさや、グループの継続時間の増長、遊びの種類の増加などによって、保育室の広さについても、よほどの余裕がみられてくるものである。

このように三才児の状態が進んでくると、四月入園直後の十五、

六名そのままの組人数の編成そのままよりも、むしろこの時期には、より多くの友人との交渉をもつような環境の変化を与えるのがその成長発達にふさわしい処置と考えられるのである。

付属幼稚園で三才児の保育をはじめたのは、きわめて古い時期からで、それが大正の初期までつづけられたものである。その後、いろいろの理由でしばらく中断されていたのが、昭和二十五年よりまたまた復活されて、三年保育を男女各十五名ずつ募集して二組編成をつづけている。

この三才児二組の状態をいろいろな点より研究観察しているのであるが、組の人数編成についての点で昭和三十二年、昭和三十三年の両年度において、四月入園当初は、子どもの生年月日順によって男女組　大小の二組に分けて編成している。この頃の年令にあっては半年の生年月日の差はなかなか顕著にあらわれてみられる。しかし三才児はやはり三才児である。しかし前述のように、半年後の後期近くになると二組ともに子どもの幼稚園生活の上に大きい変化があらわれてきて、この二組を合併して、三才児三十名一組に編成をかえてみることにした。

もっとも合併して一組にする前には、準備的ないろいろの点を考慮している。子どもたち個人的にこの変化に対して、不安をもたせないこと、二人の受持の先生に対しての感情、保護者について、などの諸点はもっとも慎重な態度ですすめている。

隣りあった三才児の二組は常に遊びのうちに次第に近づきになる機会をもたせること、先生たち二人とも両方の組の子どもに親しみあうこと、保育室やおもちゃに対してもいずれも自分たちのものというように、人の点についても、物の点においてもあとで不安やうたがいがもたれないように、など予備的期間をもって始めたのである。ことに保護者についてはあらかじめ幼稚園で子どもの指導の為によりよき方策として二組を合併することなどの点を十分に了解のもたれるように説明し、その態勢に十分の協力を要望しておくのである。二か年間の経験では予期通りの経過をたどって順調に、一組が三十名の三才児組として楽しい毎日を過している状態である。

ここで考えられることは、付属幼稚園などのようにその規定のきびしさのあるところでは望むべきところではないが、許される幼稚園では、三才児は四月、十月の二期にわたって募集されてもよい場合があるのではなかろうかということである。

これは幼稚園側だけの問題ではなく、一般の家庭のお母さんがたからの希望の声をきく場合も多いのである。つまり、四月・五月・六月頃に出生している三才児は、身体的の生育も早く、四才児として入園するのにはあまりに長い期間まつようなことになり、家庭で少々もてあます状態になるので、一日も早く友だち遊びのできる幼稚園生活をのぞんでいるわけである。